山村の副業

山地に於ける耕作には種々の困難があつて平地に比べると收穫が少いが、その山地が臺灣に於いては實に全省の百分の四十五を佔めてゐる。そこで山地に於ける農村の繁榮を計る爲めには、今後もつと農家の副業を奬勵しなければならないが、山村に適した副業として養蠶（カイコ）をおすゝめしたい。

一、副業としての養蠶の長所

(1)農閑期を利用して、一般の農家でも經營できる。
(2)僅か一ケ月の間に繭（マユ）を收穫できる。
(3)設備は至つて簡單で、農家の器具や部屋に少しばかり改良を加へれば良い。
(4)難しい技術を要せず、婦女子、老人にも出來る。
(5)多くの資本金を必要としない。
(6)山地では野桑が多いから、殊に山村に於ける副業として好適である。

二、養蠶法

養蠶を始めるには、先づ桑を栽培するのが順序であるが、暫くの間は野生の桑を使用してもかまはない。故に前もつて附近の野桑の分佈狀態や發育の程度を調査しておくと便利である。種紙一枚分の蠶卵を養育するには、桑の葉が三〇〇公斤（五〇〇臺斤）あれば足りる。

消毒：蠶室や養蠶器具は消毒する必要があるが、藥品が手に入り難い場合は、先づ完全に水洗をしてから、蠶室を一面に石灰水で塗り器具は三、四日ほど日光に晒しても效果がある。

收蟻：蠶卵が孵化して、蟻（小さな蠶兒、中文の圖參照）になつたら、種紙ごとこれを蠶箔中の蠶座紙上に置く（午前の十時頃が良い）。次に、その上から薄く碎いた籾殼（モミガラ）を撒き、更に細く刻んだ桑葉を撒く。三十分たつたら、種紙を拔き出し、鵝毛を使つて蠶座上の蟻蠶が平均になる樣にしてから、給桑を開始する。

給桑：蠶兒（稚蠶）に對しては、一晝夜七回、軟い桑の葉を蠶兒の體の二倍の大きさに切つて與へる。成蟲になつたら一晝夜五回あたへて、桑は刻む必要が無いが、充分に成熟した桑の葉で飼育すべきである。蠶兒は三、四日續けて桑を食ふと、一晝夜絕食して、就眠脫皮する。就眠を四回繰りかへすと、五齡になるが、五齡の頃は食桑量が最も多く、一週間以上の期間を必要とする。

除沙（ジョシヤ）：一般には綿網、又は竹草網を蠶箔（サンパク）の上に重ねて、給桑を行ひ、蠶兒が桑葉の上にハヒ上つて來たら、網と共に別の箔に移して、前の箔に溜つた蠶糞は棄てる。

蠶兒の就眠前後には必らず除沙を行ひ、殊に成蟲になつたら毎日一、二回は行はねばならない。

擴座分箔：蠶兒は日々に成長するから、それに應じて蠶座面積を一日に二回擴大しなければならない、一箔で面積が狹い場合には二箔に分け、一枚の種紙から二十箔位に分けるべきである。

眠中の處理：蠶兒の就眠中には、給桑を停止し、室內は乾燥、安靜を保ち、光線や冷風を入れない樣に注意する、發育就眠の遲れた蠶兒は直ちに取り去つて淘汰する。脫皮が全部完了したら、また給桑を開始する。

上簇（ジョウゾク）：蠶兒は一ケ月後には成熟する。成熟した蠶の全身が透明になり、桑を食べなくなつたら、草簇（蠶の營繭をする場所）の中に移して繭をつくらせる。

繭收穫：上簇後七日すると、蠶は繭をつくり終り、蛹（サナギ）になるから、この頃が繭收穫の適期である。繭の收穫は細心の注意をもつて行ひ、汚れたのや薄い繭は別に取り除いて、外觀が良くて清潔なものを殘す。運搬の際には繭に損傷を與へない樣に注意すべきである。

三、養蠶の利益

現在臺灣に於ける養蠶の成績は、種紙一枚分の蠶卵を飼育して、約一〇公斤（十六、六臺斤）の繭を收穫でき、これは新臺幣一〇〇元に値する。故に家族四、五人の農家が、春秋二回の農閑期を利用して種紙二、三枚の養蠶を行へば毎年五、六百元の利益をあげる事は容易である。

繭の用途：絹の着物一枚をつくるには繭三五〇〇個を要するが、種紙一枚の卵を飼育すれば絹衣二枚をつくるに足る繭絲を生產できる。絹靴シタ一足をつくるには二〇〇個の繭で足り、掛ブトン用一枚二公斤の絹綿は種紙二枚分の繭を必要とする。

蛹は食用に：干した蠶の蛹は、三〇パーセントの脂肪分、五〇パーセントの蛋白質を含んで居り、滋物性の蛋白質と比べて二倍以上の營養價があるので、養魚、養鷄の飼料として好適である。また蠶の蛹にはビタミンB（ビー）2が含まれて居り、その酵母も豚肝臟の數倍ないし十倍あると云ふ事が發見されて、最近では醫用油や食用油に使用されてゐる以外、ビタミン錠製造にも使用されて、國民學校學生の營養補給に供されてゐる。

蠶糞は飼料に：蠶糞は堆肥製造に今まで使用されて來たが、最近の實驗の報告によると、糠、麩（フスマ）、麥などよりも家畜の飼料として勝れて居り、特に養鷄飼料として使つたところ、卵の黃ミを濃くし、孵化率も良いとの事である。

台灣に於ける養蠶：今まで臺灣に於いては養蠶業がそれほど盛んでなかつた關係で、今年の繭生產の豫想量は五〇、〇〇〇公斤と見積られて居り、その用途は次の如くである。

①生絲とその製品五、〇〇〇公斤は軍用或は民用の一部に供する。
②蠶蛹四〇、〇〇〇公斤は四〇〇〇人分一年間のビタミンB2の補給に供せる。
③蠶糞五〇〇、〇〇〇公斤は、緬羊一、二〇〇頭、鷄三〇〇、〇〇〇羽の飼料となり、肥料にする場合は、堆肥一、七五〇、〇〇〇公斤を製造できる。

將來本省に於ける養蠶の條件が改良されゝば、毎年少くとも價格三、五〇〇、〇〇〇萬元に達する繭一〇〇、〇〇〇公斤、蠶種紙二五〇、〇〇〇枚を產出できる。僅か一箇月の副業でこの樣に多くの利益をあげて、山村經濟を豐かにするのであるから、養蠶業は本省に於いてもつと〳〵普及されて良いと思ふ。

春聯（第二回）……藍蔭鼎
財北南西東納戶——福多秋夏春迎門

育苗 よい苗は「增產のもと」

秘訣

「育苗に成功すれば豐收は間違ひなし」と一般に云はれてゐるほどに、米の增收を計るためには、先づ强健な幼苗を育てる事が大切である。然しその爲めには、在來式の苗代（ナハシロ）よりも短冊形苗代を採用すべきである。改良苗代の長所と管理上の注意事項は別の機會に譲るとして、今日は第一期作に於ける强健な幼苗の育成方法を說明してみよう。

一、防風垣の設置

本省に於ける第一期作苗代の期間は、氣候が寒冷である爲め、中北部の地方、特に季節風の烈しい所では、防風垣を設置して苗代を寒害から保護する必要がある。防風垣の材料は地方によつてそれぞれ異るが、高さは十尺ぐらゐが適當である。（圖を見よ）

二、苗床の位置

苗床は、水利、陽あたり、通風、運搬などに便の良い地點を選び、土地は中等に肥えた所で良い。また苗床は連續的に同じ場所に置かれる事が多い爲め、地力の消耗が激しいから、堆肥を多く施し、客土をするなど（他處の土をもつて來ること）、地力を保持する事を忘れてはならない。

三、整地

苗代は、第二期收穫後、迅速に耕起して、充分に耕土を風化させる（但し深耕する必要は無い）。播種の一〇——二〇日前に第二回の耕起を行ひ、播種三日前に鋤をもつて第三回目の耕起（三寸程度）を行ひ、土塊を細く粉碎する。播種の前日には輕く灌漑をした後、「手把」を用ひて土地を平らにし、排水をせずに、そのまゝ翌日播種を行ふ。

四、苗床のつくり方

先づ苗代の周圍に下圖の如く、幅一尺五寸、深さ五寸の小溝を掘る。次に苗代の內に、四尺の間隔で、幅一尺、深さ五寸の小溝を掘つて短冊形の苗床をつくる。苗床の表面は凸凹があると、水溜りが出來るから、平らにすべきである。

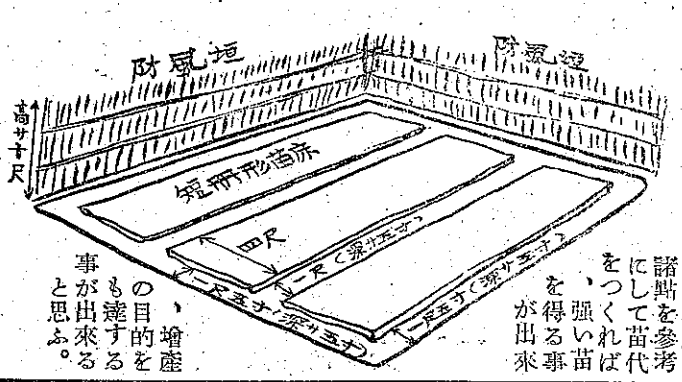
五、施肥

施肥の適不適合によつて苗の强弱が決定されるから、施肥には細心の注意をもつて臨まなければならない。例へば、施肥量が多すぎると、苗が軟弱になり、肥料の散布が均一しないと、苗全體の發育が揃はない。一坪についての適當な施肥量は、窒素一八——四五公兩（一公兩は〇、三七五臺兩）、燐三七——四〇公兩、加里一八公兩が標準である。

六、播種

發芽した種子を（催芽法に關しては第一卷第十一期を參照）一坪について三——四合の割合で、苗床一面に平均に播く。次に種子が土中に埋まる樣に、その上から丸木をもつて輕く壓力を加へた後、豫め燒いておいた土を床面が見えなくなる位に一面に散布する。

七、苗育成の日數

蓬萊種苗の育成には三〇日——四〇日要するとされてゐるが、氣溫の高低によつて、苗の日數にも增減がある。特別に寒い時には、苗の成長も當然遲くなり、從つて四十日を過ぎても田植が困難な場合もあるが、田植に適した苗の標準は高さ五寸位が適當であらう。但し、最も注意すべき事は、苗の成長を促進する爲めに、追肥を施してはならない事である。追肥を與へると、苗が軟弱になり、田植の時に損傷を受けやすく、ひいては稻の生長にも影響するからである。

いよいよ時期も播種の頃となつた。もちろん農民諸君には各々長い間の經驗があらうが、以上の諸點を參考にして苗代をつくれば、强い苗を得る事が出來、增產の目的をも達する事が出來ると思ふ。